

ずいそう

## 南太平洋で活躍する日本人

佐藤孝文



## ◆キリバスという国

太平洋のまんなか付近にゴマ塩をまぶしたように、沢山の小さな島々があるのはご存知だろうか？ かつて植民地であったこの島々の多くは近年独立を果たし、それぞれの民族文化を保ちつつ国家を形成している。この一国にキリバス共和国という小さな島国があり、昨年から今年にかけて数度訪問した。当社がキリバス政府から太陽光発電プロジェクトのコンサルタント業務を受注し、契約や会議の為に訪問する機会を得たものだ。読者のみなさんにとっては、あまりなじみのないこの国と、そこで活躍する日本人について紹介したい。

キリバス共和国は、南太平洋に広く散らばる33のサンゴ礁でできた島々からなる国だ。首都のタラワは北緯1度だから、まさに赤道直下である。面積はわずか730 km<sup>2</sup>、日本だと淡路島より少し大きい程度で、人口は約10.3万人(2010)だ。日付変更線が太平洋の赤道付近で曲がり方が激しいのは、この国の領土が広大な範囲に亘る島国であることが原因だ。太平洋で最も広い海域を有する国の一つなのだ。今回のプロジェクトで大規模な太陽光発電所が整備される首都の南タラワは年中30度を超える、灼熱の太陽が降り注ぐ常夏の南国だ。このタラワ島には、この国の約半分5.4万人が住んでいる。当社が担当するプロジェクトは、日本政府が拠出した太平洋環境共同体基金(PEC基金)によって、太陽光発電所を新設するものだ。これまで、ディーゼル発電所に頼っていた電力に加えて大規模な再生可能エネルギーを導入し、年々増え続ける電力消費をまかなうと同時に、温暖化ガスの削減を目的としたものだ。このキリバスという国、国土の平均標高はたったの2mしかないという。

地球温暖化によって海面が上昇すれば、この国の



キリバス共和国アノテ・トン大統領(左)と筆者(右)  
(大統領執務室にて 2013年4月)

人々はここに住めなくなるという現実が目の前に近づいている。このプロジェクトはこうした思いを反映したものであるのだ。キリバスの温暖化ガス排出量は世界でも最も低レベルにあるにも関わらずである。

キリバスの国民は大部分がミクロネシア人だ。比較的小柄で優しい顔立ちをしている。国民性なのだろうか、誰かが困っていると近くにいる人が必ず声をかけてくる。現地で車が故障した時、早朝にも関わらず、近所のおじさんが家から工具を沢山もってきて、無言で手伝ってくれた。なんて親切なんだ！

## ◆キリバスの日本人

このプロジェクトと通じて1人の日本人に出あった。ケンタロ・オノ氏だ。なぜカタカナで紹介したかというと、彼は純粋な日本人でありながら、キリバス国籍を持つ外国人だからだ。宮城県で生まれ育った彼は、テレビの影響で南国に興味を持った。彼はその思いをかなえるため、キリバスに単身渡航し、キリバスの有名高校に入学したのだ。わずか16歳の時のことだ。高校を卒業後、そのままキリバスに住み着いて国籍を得たという。貿易会社で働いた後、国営テレビの役員、商工会議所会頭、そして大統領補佐官など、若くしてこの国の要職を歴任した。日本語は勿論だが、猛烈に勉強したという英語とキリバス語はビジネスや外交交渉でも必要とされるほど堪能で、我々だけではなくキリバスを訪問した数々の日本の著名人達が御世話になったはずだ。わずかな期間ではあったが、彼の行動を目のあたりにし、語学だけではなく、国際政治、経済、歴史等々幅広い知見と、何よりも日本と太平洋の将来について大きな夢を持っていた。それを実現しようとアグレッシブに行動している姿を見て、こういう人材が我が国には必要なのだと実感した。彼は、東北大震災を期に2人のお子さんと帰国し、郷土の仙台を拠点として国内外で活躍している。これからも、類まれな才覚を生かし夢が実現するよう活躍を祈念している。

キリバスには他にも何人かの日本人が仕事や公務で滞在している。また、8名の海外青年協力隊員が派遣されており、技術や医療などの分野で活躍している。決して十分とは言えない生活環境の中で、現地の生活文化を理解し、目をキラキラさせて楽しく話す姿を見て、頼もしく思った。彼らもまた、将来の日本を支える人材に成長することだろう。実に楽しみである。